

終末星辰神話ラスト・エンブリオ ～人よ、いざ星を穿たん～

エレインヘン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突如として意識を失った藤丸立香は、目を覚ますと異世界にいた。荒廃した街並み。天まで届く謎の巨塔。天地を跋扈する不倶戴天。倫理を侵す許されざる原罪。逃れられぬ人類滅亡の前に、最後の英雄は――。

「俺は、この世界を完膚無きまでにぶっ壊す」

目次

予告	1
本編	
序幕	3
第1節 八つ目の異聞帯 (1 / 3)	10
第1節 八つ目の異聞帯 (2 / 3)	16
第1節 八つ目の異聞帯 (3 / 3)	23
第2節 星の恩恵を宿すモノ (1 / 2)	29
第2節 星の恩恵を宿すモノ (2 / 2)	36
第3節 世界を憎む獣 (1 / 4)	42
第3節 世界を憎む獣 (2 / 4)	50

予告

予告

ああ。無論、わかっているとも。

これは完全なイレギュラー。人類史に突如として生まれた変異事象を腫瘍と比喻するのならば、これは謂わば悪性腫瘍。決してあつてはならぬ事象の連鎖が生み出した、哀れな人類史だ。

故に切り捨てられた。故に無かつたことにされた。患部を切除するのは、まったくもつて道理だ。これ以上正常な細胞が侵されぬように早め早めに切り離すのは、極めて真つ当で、そう……当たり前のことなのだ。誰しもが悪しき異端の存在に憐憫など覚えることはない。そも、記憶に残そうとすら思わない。

だがもしも。その世界をたまたま観測した者がいたのなら。救いを求めたたった一人の人間の手によつて掬いとられたものが、その世界だったのならば。……否。たればで語るのは、いささか礼儀知らずであつたな。

——これは数多ある人類史の、あり得たかもしれない姿である。

「オレはランサーだ。粗野で凶悪で快樂主義者と三拍子揃つた駄目サーヴァントなので、正しい用法・容量を守つた上で適切な態度で接してくれよ。人類最後のマスターサマ？」

そこに至るまでに多くの神仏の苦悩があつた。あらゆる挑戦があつた。希望があつた。絶望があつた。研鑽があつた。試行錯誤があつた。

「ボクの為に死んで、リツカ」

掌を零れ落ちた涙があつた。憤怒に染まる者の流した血があつた。善悪錯誤者の愉悦があつた。存在ごと忘れ去られた歴史の被害者の怨嗟があつた。

「汎人類史のオレなぞ知つたこつちやねエな。では何か、手前がこてめエ

身を焼き尽くして尚止まぬ激情を鎮めてくれると?」

だがそのいずれもが! 各々の良き道を信じた故の行動であったはずだ! そこに無価値なものなどないと——無価値と決めつけてはならないと! お前たちはそうやってこれまで歴史を紡いできたはずだ!

「お前さんは間違っちゃいない。ここで何もしなければ、英雄の名が廃るってもんだ。後の時代の者たちへとバトンを繋ぐのが、俺たち英雄の役目だからな」

故にこそ断言しよう! 我が御旗の下に、我が名の下にツ! たとえその歴史が陰惨に塗れていようとも。死と従属の連鎖によるものであったとしても! それでも尚、人類には一条の正義があつたとツ……!!

『我が名は魔王アジ・ダカーハ。智を絞れ、力を尽くせ。そして踏み越えよ! 我が屍の果てこそが正義であるツ……!!』

来るがいい我が勇者。善悪なぞ何の意味も為さないこの世界で、悪の魔王を討たんとする善なる者よ!

これより綴られるは異端の物語。何の記録にも残らず、誰の記憶にも残らず、泡沫の如く消えゆくのみこの世界で生まれた、最も新しき神話である。

本編 序幕

歴史パラダイムシフトの転換期という言葉がある。それは人類が繁栄する上で必要不可欠な出来事であり、無数に連なる並行世界が一つに収束する点のことを指す。例えば、人と神との決裂であるギルガメツシュ王の出生。例えば、イエス・キリストの死。いずれも人類史を形作る上でなくてはならない重要な出来事である。

歴史の転換期は人類が繁栄すればするほどに発生が少なくなっていく。それは人類史の可能性が数多く枝分かれしたことにより、歴史の収束が起こりづらくなったことが原因だ。19世紀以降は、それが特に顕著に表れる。決して起こらないわけではない。しかし、紀元前や中世程に重要な歴史の転換期は現代に於いてまず起こり得ない。

また、歴史の転換期は魔術師たちの中では人理定礎という言葉としても扱われるのだ。正しく歴史の転換期を経験してきた人類史を“編纂事象”。なんらかの要因によって本来起こるべき歴史とズレてしまった世界を“剪定事象”と呼ぶ。

かつて憐憫の獣は人類史において最も重要な七つのターニングポイントを特異点として人理焼却を試みるも、その野望は人理継続保証機関カルデアによって阻止された。連結解除され、散らばった魔人柱の残党もカルデアによって倒された。いずれも決して楽な戦いではなかった。その過程において失ったものもあった。しかし結果的に、人類は見事人類悪に勝利したのだ。

しかし、彼らの物語は未だ終わらない。突如として降臨した異星の神、8人のクリプター、ロストベルト異聞帯、空想樹。地球は突如として漂白され、人類史は終焉を迎えた。

これより始まるのは汎人類史を、未来を取り戻す物語。苦悩し、苦痛に喘ぎ、別れに涙し。それでも尚君は進む。立ち止まらず、前だけを向いて。

……さて。長ったらしい前口上はここまでにしようか。

これは誰の記憶にも記録にも残らない、最も新しい終わりの英雄譚。神々が人類の進化を促したのが始まりだとするのであれば、終わりとは神々との決別であるのが道理だ。人類最新の終末神話。これはつまるところ、人類が自らの手で進化するに——否。生まれるにあたって必要な最後の胎盤を意味する。

——私は知りたい。滅びる世界が君という存在に何を残すのか。若しくは君が滅びる世界に何を想うのか。

しかし、もしも、誰かの記憶の片隅にでも残るとするのなら。私は君の軌跡を——君と彼の織りなす奇跡を、こう名付けよう。

終末星辰神話 ラスト・エンブリオ
人よ、いぎ星を穿たん

無事に四つ目の異聞帯を攻略したカルデアは、次なる目標であるギリシャ異聞帯に向かう為の準備を行っていた。準備と言っても、主にそれをしているのはダ・ヴィンチちゃんやシオンで、立香とマッシュ——あとはゴルドルフ所長も——は手伝えることがあまりなく、普段通り訓練するという日課をこなし、後は各々自由に過ごしているのだが。

藤丸立香は元は一般人である。魔術の魔の字も知らずに生まれ育ってきた、至って健全かつ平凡な日本男児なのだ。つまり何が言いたいかというと、彼は魔術的な知識に乏しい。故に最初は魔術用語は愚か神話や英雄のことすら無知であったのだが、そこは普段の座学や当人から話を聞いたこともあり、素人に毛が生えた程度の知識は得ることが出来た。とはいえ彼は未だ知らないことの方が多い。故に自由時間に本を読むという習慣のようなものが生まれたのである。

「む？ そいつは王^{シャイ・ナリメ} 書じゃねえか。また随分と勉強熱心だなマスタ

アーラシユが立香に話しかける。彼の言う通り立香は今『王書』と呼ばれるイラン神話最大の叙事詩——その日本語翻訳版を読んでいた。

「アーラシユの地域の神話、そういえばあまり知らなかったなつて」

日本ではイラン神話の知名度は酷く低い。イラン神話の代表的な英雄であるアーラシユの名前は愚か、神々の名前すら知られていない。それは世界的に知名度が低いわけではなく、日本にあまり馴染みがないからだ。

例えば弓兵——アーチャーの語源となった人物。それがアーラシユ・カマンガー——アーラシユ・ザ・アーチャーとも呼ばれる——という英雄であるが、このことを知る日本人はかなり少ない。強いていうのであればゲームで少し目にしたことがある程度のものだろう。「アンリマユも確かイラン神話だったよね？」

「ああ。イラン神話は、つてよりゾロアスター教神話の特色の一つに善悪二元論つてのがあるだろ？ その悪側のトツプがアンリマユで、善側のトツプがアフラ・マズダーだ」

イラン神話は成立年代によって異なる神話体系を持つ非常に特異な神話であり、また後の神話に多くの影響を残したことで知られる。この世は善と悪とで分けられているという善悪二元論を掲げ、悪神と善神が争った末には善が勝利し悪が破れるという特色を持つのだ。その他にも様々な例があるが、世界を通してみてもここまで善と悪が明確な神話は他にないだろう。

尤も、カルデアに召喚されているアンリマユは必要悪を願われた誰でもない『誰か』であり、厳密に言えば神霊のアンリマユとは別物である。

「アフラ・マズダーを筆頭にウオフ・マナフ、アシャ・ワヒシユタ、スプンタ・アールマティ、クシャスラ、ハルワタート、アムルタートからなる七柱の善神群。それに対しアンリマユを筆頭にアエーシユマ、アジ・ダカーハ、ジャヒー、タローマティ、ドウルジ、バリガーから

なる七柱の悪神群。かの神々による争いの末に善が勝利を手にするってのがぎつくりとした流れだ」

「アジ・ダカーハ？」

「お、なんだ？ 聞いたことあるのか、マスター」

「名前だけ。ゲームとかで偶に出てくるから」

「んじやあまずはアジ・ダカーハから説明するか。そうだなあ……まずアジ・ダカーハについてマスターはどのくらい知ってるんだ？」

「えーっと、三つ首のドラゴンってことくらいしか……」

日本のサブカルチャーによつて名前だけは広まっているアジ・ダカーハは、しかし実際にどういった存在かを明確に答えられる者は少ないだろう。

アジ・ダカーハの登場する話は「アヴェエスター」という聖典に記載されている。しかし、その「アヴェエスター」自体が非常に難解な言語でできている上に、現在はその4分の3が失われてしまっている。故に解読が難しく、正しい文献の判別が難しいのだ。

「アジ・ダカーハは三つ首と六つ目を持ち、千の魔術を扱い、傷を付けてもそこから自分の眷属を無尽蔵に生み出すことが出来る怪物だ。他にも世界の三分の一を食ったり、翼が天を覆い隠すほどに巨大であつたりと、他の怪物とは一線を画す真正正銘の化け物だ」

所説あるものの、有力とされている説にアジ（蛇）とダカーハ（人）に分けられ、蛇と人の怪物を意味するというものがある。現在はペルシャ語でドラゴンと訳すが、その歴史をさかのぼればインド神話等と関連性があり——と名前の由来だけでもかなり出典がちりばめられており、そのルーツをたどるのはかなり難解かつ複雑だ。

「アーラシユは見た事あるの？」

「いや。見たことはねえが聞いたことならある。曰く絶対に倒せない有翼の蛇の化生がいるってな。そして彼の大英雄スラエータオナですら結局殺しきることはできなかつたとか」

わからない単語をメモ帳に書き留めながら、立香は生じた疑問を問う。アーラシユをして大英雄と称されるスラエータオナなる英雄のことも気になったが、まずはアジ・ダカーハについてを知りたかつた

からである。

「殺しきれなかったってことは、まだ生きてるの？」

古今東西、過去に殺しきれなかった怪物が封印されている話や今に至るまで世界のどこかで生きながらえている者がいるという話は多く存在する。有名な例で言えば、マーリンは今も生きて世界を幽閉塔から眺めているという話だろうか。またインド神話においては、カルキというヴィシュヌの化身がカリ・ユガを終わらせるために生まれるとされている。等々、意外と現代まで生きている神話の存在というのは多いのだ。

「最終的にダマーヴァンド山の地下に封印したアジ・ダカーハは、いずれ終末の時に解き放たれて天の創造物の三分の一を食るも、蘇った英雄■■■■に倒され——だぞ——だ」

——ごめん、アラシユ。よく聞こえなかったからもう一回、その言葉はしかし、立香の口から紡がれることはなかった。

強烈な倦怠感と寒気が突如として彼を襲う。今までも何度かこうして拉致されるが如く意識を失うことはあったが、今回はいままでのそれとは比較にならない。

「——あ、」

刹那の抵抗すら許されず、藤丸立香はその意識を闇に塗りつぶされた。

*

藤丸立香が倒れた。それは瞬く間にノウム・カルデア中に知れ渡り、大混乱を招くこととなった。

医務室に運ばれた立香をあらゆる英霊・医療スタッフが診断するも、その原因はまったくの不明。唯一とっていい手がかりは立香が倒れる寸前に読んでいた本『王書』のみ。王書そのものにも魔術の類は仕組まれておらず、『いたって普通の本を読んでいたら立香が意識不明になった』という結果だけが残ることとなった。

「現在、彼の意識は彼自身の体の中には存在しない。そして何者かに

襲われた痕跡も、というかそもそも数値上はいたって健康体と診断されている。魂も体の中にちゃんとあり、魔術の気配も存在しない。ただ意識のみがぼっかりと虫食いのように消えてしまっている。まるで密室殺人のようだ」

「一応その手の知識が豊富なサーヴァントにも聞いてみたけど、やっぱりダメだね。彼の意識——というより、彼の精神体だけがどこ別の世界に引き寄せられてしまっている。これが特異点や異聞帯だったのならまだ、対処のしようはあるんだけど……」

「私も今霊子演算装置トリスメギストスⅡを使って全力で立香さんの精神体の行方を追っています。現状、彼は私たちにとって唯一といっていい戦力です。彼がいなければ異聞帯の攻略は愚か、特異点の修復すらままなりません。何としても彼を助け出しましょう」

ホームズやダ・ヴィンチ、シオンまでもが総動員で知恵を絞っても、立香の精神体の行方は影すらつかめない。まるでこの世界から突然消え失せてしまったように。または空気に溶けるようになってしまった。

「そういえば……以前にもこれと同じような状況に陥ったことがあると伺っていますが、今回はどうなんですか？ 前回と同じ方法で立香さんが拉致されたとしたら、状況は一気に改善が見込めると思うのですが」

「それは既に私の方で試したよ。でもうまくいかなかった。まるで異物が世界からはじき出されたかのように、ポンって完全に意識が飛ばされてる。仮にどこかの平行世界に行っているのだとしたら、まだ話は違ってくるんだけどね」

「……………手詰まり、か」

空気がどんよりと重みを帯びる。

手詰まり。それは今までどんなピンチをも乗り越えてきた万能の天才、その敗北を意味する。手出しができない状況はこれまで何度もあった。情けなくも藤丸立香たった一人に全てを託すしかないことも少なくなかった。しかしそのいずれも、最善に近い手を打ってきたつもりだった。

「——え」

ふと、シオンが困惑の声を漏らす。その手には霊子演算装置トリス・メギストスⅡの演算結果が握られていた。

「あ——…えーと、皆サン、落ち着いて聞いてください。立香さんの所在が判明しました」

バツ、とシオンに視線が集まる。

何度も言うが、現状で手がかりらしい手がかりは絶無である。故にようやく掴んだ希望に——それこそ藁にも縋る勢いなのは、至極当然の反応だった。

「それで、ミスシオン。ミスター藤丸は今どこにいるのかな？ 平行世界でもないとなると、最早異世界くらいしか見当がつかないが——」

ふう。と、冗談を言えるくらいには気が緩んだホームズは冷静に演算結果を早く言えと急かす。彼自身ですら気付いてはいないが、どうもらしくないほどに緊張状態だったらしい。

しかし、そんな彼の安心とは裏腹に——演算結果は告げられた。

「はっ」

「……え？」

「今彼がいるところは、完全無欠に異世界です」

「——、」

今度こそ、その場の空気は完全に凍り付いた。

第1節 八つ目の異聞帯（1／3）

泡沫のような夢だった。

誰もが優しく、笑顔に満ち、争いのない理想郷。

人類は最盛期を迎え、あらゆるエネルギー問題や社会問題などはすでに過去のもの。貧富の差はあれど、そこには確かに人間としての尊厳があり、また誰しも可能性が残されていた。

『ぼくが、この地球上で最後に流れる血であることを——最後の犠牲者であることを、誓ってくれたんだ』

そう言って少年は笑っていた。拷問紛いの実験も、信仰を冒瀆されても、毒で悶え苦しみながらも、人類の未来は明るく希望に満ちているのだと。そう信じてやまなかった。

『ただ……一つだけ。もしもぼくの願いが一つだけ叶えられるのだとしたら——』

だからこそ、私は人類を許さない。

『太陽を見てみたいな』

少年の願いを、誓いを、ただの一つも果たすことのなかった人間共を。

「必ず殺すとも。我が身に誓って——我が■■■に誓って」

——目覚めの時は近い。

「……姉弟^{ブラザー}——。こ……人………な？」

「気付い——……。俺だつて——い」

若い男性と女性——否。少年少女といつてもいいくらいだろうか。恐らく立香とそう離れていないくらいの年齢の二人が話し合っているらしい。

臆気だった意識はその喧噪の所為とでも言うべきか、完全に覚醒し

たらしい。どのくらい眠っていたのか——意識を失っていたのかという方が的確だろうか——はわからないが、今の立香の状態を言い表すのであれば朝の目覚めのようなスツキリとした清々しい気分だ。

人によつては朝の気怠げさが抜けきれない状態とも言えるだろうが。生憎と立香は寝覚めがいい種類の人種である。

(こっちは——……、)

LEDの光の眩しさに多少の鬱陶しさを覚えつつも、立香は天井のあちらこちらに視線を走らせる。有孔ボードとLEDライトが規則的にならんでおり、立香は自分がまだ普通の学生であった頃の、学校の天井のそれに近いなという感想を抱く。

(保健室……?)

結論から言うと、そこは保健室であつた。

清潔感のある真っ白なベッド。戸棚には消毒液や傷薬、包帯等の応急手当に必要な医療道具がガラス越しに陳列されているのがわかる。立香のベッドから少し左側には、隣のベッドとの仕切りとしての柵割を持つロングカーテンが今は必要ないと言わんばかりに丁寧に束ねられていた。これらを総評すると、日本の学生であれば一度は目にしたことであるだろう保健室であることは間違いない。

立香がなんとなく感傷的になつていたところに、突然ガラガラとスライド式の——これまた学校でよく使われている懐かしいもの——ドアが開く音が響き渡つた。

そこにいたのは金髪紫目の少年と健康的な褐色肌の快活そうな少女だ。

少年の方は学校指定らしい服を比較的大胆に着崩していて、首にはネコミミヘッドホンが装着されている。若干制服のサイズが大きいように見えるのは、果たして思ったより身長が伸びなかったのか。それとも単純にピッタリと着こなすのが苦手なのか。邪推ではあるが、おそらく前者が正しいだろう。

一方で少女の方は流行に敏感な年頃の女の子、といった印象を与えさせる。スカートは膝が見えるか見えないかくらいまで裾上げされ

ており、これもまた校則違反にはならない程度のお洒落である。少年の方とは違いワイシャツとブレザーをきちんと着ていることから、少女が誠実か真面目な性格の持ち主であることが想像できるだろう。「だからさっさと自白しちまえよ姉弟。ブラザー情状酌量の余地ありとして禁固15年の実刑判決くらいにまで減刑されることを願おう！」

「なんでいきなり実刑判決なんだ……！腕のいい弁護士を呼べ、この頭のおかしい人間を完全論破できる弁護士を!!」

両者は未だにがみがみわーわーと言いつつ合意をしているが、その言葉に乗っている感情は負のものでないことは明確だ。端的に言つて旧知の仲のような慣れ親しんだ言葉の応酬であることが伝わってくる。

「はじめまして、俺は藤丸立香。えっと……多分、助けてくれたんだよね。ありがとう」

少しの逡巡の後、立香は二人に声をかける。

「よかったな姉弟。ブラザーこれで示談に持ち込めばなんとか首の皮一枚だね」

「だーかーらー！俺じゃねえつて！気付いたら廊下に倒れてて、俺は廊下に転がってた消火器を戻そうと持ってただけなんだつて！」

ああもう、話が進まねえ。と少年が独り言ごごちりながらガシガシと頭を搔く。そして数瞬の後深呼吸を幾度か繰り返し、ようやく立香に話しかけた。

「とりあえず目覚めてくれてよかった。俺は西郷さいこうほむら焔で、こっちの煩いのが——」

「煩いのはお互い様だつて。私は彩里あやさとすずか鈴華。よろしくね」

「よろしく。それで、えっと——」

立香は再度辺りをキョロキョロと見回した。やはりどう見てもここは保健室であることを確認したうえで——、

「ここは何処？」

「おおっと、記憶喪失の典型的な質問第一位！初めて生で聞いたかも」

「無神経ここに極まれりかよ。……ここは宝永大学付属学園、その保健室だな。立香が廊下で倒れてるところを俺が見つけて、ここまで運

んだ」

「嘘はついちゃいけないぜ姉弟。^{ブラザー}運んだのは私。存分に感謝感激するがよい！」

にししと笑いながら豪快に感謝を要求してきた。中々に強烈かつ個性的な性格のようだが、そこは藤丸立香。これ以上に奇怪な性格の持ち主や文字通り狂化している者たちと伊達にコミュニケーションを図ってきたわけではない。彼のコミュ力は最早神々との対話すら可能なレベルにまで達しているのだ。

「さて。起きたばつかで悪いが……聞かせてくれ。立香は意識を失う直前まで何処にいた？ 覚えていないならそれでもいい」

「大丈夫だよ。それで何処にいたかって話なんだけど———多少。凄く。滅茶苦茶に信じがたいかもしれない。それでもいい？」

「オーケー。安心してくれ、そういうのには慣れてるし、素っ頓狂な話でも整合性が合えばとりあえずは信じる」

「わかった。えっと、まずは———」

立香は焰たちに魔術のことを暈しながら話し始めた。

ノウム・カルデアという海上基地、のような場所にいたこと。本を読んで神話関係の勉強をしていたこと。その手の話に詳しい人に教えてもらっていたら急に意識を失ったこと。そして気が付いたらここで目覚めたこと。

無論意識を失ってどういうプロセスを辿ってここで目覚めたかは全くもってわからないので、それも懇切丁寧に説明しながら、立香は現状確認という意味合いも込めて、順序だてて説明した。

*

「なるほど。つまり立香は少なくとも日本付近に存在しない海上基地で意識を失って、目を覚ましたら宝永大学付属学園の保健室でしたと。———なんじゃそりゃあ!？」

「立香の素っ頓狂具合が焰のキャパを上回ったね」

焰は立香を胡散臭いものを見るように睨みつける。雰囲気として

は本気で疑っているそれではなく、幸運を寄せる壺のセールスに来た者を見るそれに近い。

いずれにせよ、立香の話したことを焰は微塵たりとも信じていないらしいことは伝わった。

「そりやそうだろ。現状俺たちが何のためにこうしてナノマシン研究をしてると思ってるやがる。立香の言うことがすべて真実ならこれ以上ない茶番劇だろ。日本海か太平洋にそんな基地があるって方がまだ信じられる」

「そんなに信じられない？」

焰たちの反応を見てみると、どうやら立香の言っていることには想像以上に重大な矛盾があるらしい。そもそも立香自身が未だ現状を完全に理解しておらず、今いる場所が日本であること以外に知っている情報がないのでどうしようもないのだが。

「信じられないというより、ありえない。立香の言っていることがすべて真実である場合、外に蔓延ってる怪物どもとスーパースールの二つの問題を同時に解決できる何らかの——おい、まさか何も知らないのか？」

焰は何度目かわからない驚愕を立香に向ける。しかしそれは今までのものと違い、まるで知っていて当然の常識を知らない存在を見たものだ。

それは鈴華の方も同じであった。わなわなと、そしてどこか悲哀を帯びた表情で立香を見る。二人の豹変から得たことは、少なくともこの世界の現代日本に於いて知っていなければ——知らなければ明らかにおかしいことを立香は知らないということだけだ。

「……………とりあえず、見た方が早い」

焰は色々と言いたいことがあるような、呆れているような、様々な思考がごちゃ混ぜになって感情が混乱しているようななんとも言えない微妙な表情を浮かべる。ただ一つ言えることは、ある種の諦観に近い——天災に振り回されている哀れな一般人の如く——ものを立香に向けているということだけである。

「え——」

「これが日本の現状で、加えて立香の話が信じられない根拠だ」

そこにあつたのは、巨大な建造物であつた。

水晶に似たような材質で構成されている塔のような建造物は、成層圏をも超えて天高く聳え立っている。

立香の記憶にある近代日本の面影は影も形もなく。所狭しと敷き詰められた数多の高層ビルは軒並み瓦礫と化し、その名残を感じさせる程度でしかない。綺麗に舗装されていたであろうコンクリートの道路や地面も、巨大な足跡や破壊痕を残すのみである。外を歩く人は誰もおらず、ここが某世紀末漫画の再現であると言つたのであれば信じられるほどに荒廃し、退廃しきつていた。

そして何よりも目を引くものは――

「日本はその人口の約8割が行方不明か死亡。経済は完全に崩壊し、首都に至つては物理的にも再起不能ときた。加えて追い打ちをかけてるのが、あれだ」

「嵐の、壁……」

「超巨大なスーパーセルが日本を包み込むように発生し、あらゆる電磁波や物理的干渉を拒絶している。諸外国との繋がりは完全に絶たれて、輸出品どころかSOSすら出すことはできない」

それは異聞帯の最たる特徴であり、容易に攻略することができない要因の一つ。カルデアではシャドウボーダーやノーチラスにて、虚数空間を通ることで乗り越えられた無慈悲なる拒絶の壁。

「要するに――日本はもう、滅んでる」

存在しない第八の異聞帯。ロストベルト藤丸立香は今、そこにいた。

第1節 八つ目の異聞帯（2／3）

「——日本はもう、滅んでる」

あまりに重大すぎる情報の陳列。これがホームズであれば成程としたり顔で推理を披露する——若しくはまだその時ではないと茶を濁す——のだろうが、立香は頭脳も一般人並みである。故に即座に情報を処理し、結論を導き出すことはできない。というより、大体の人物はそんなことはできっこないのだ。彼を取り巻く人物たちが際立って優秀すぎる故に、普通の感覚が麻痺しているだけである。

それでも、立香は思考を止めない。こういった状況下に於ける思考停止が如何に恐ろしいかを、彼は身を以て経験している。

（あれは、スーパーセルの嵐の壁？ そしたら此処は日本の異聞帯でことになるけど）

それも本来存在しないはずの日本異聞帯である。立香が気を失っている間に新たな異聞帯とクリプターが発生した可能性も無きにしても非ずではあるが、確率的には那由他の彼方にあるかないか程度だろう。故に今最も有力である仮説は——

（ということは、武蔵ちゃんの時と同じかそれに似た場所に飛ばされた）

この場合、立香をここに召喚した何者かが存在するはずだ。立香は夢の中で数々の世界に飛ばされてきたものの、その一度として犯人が誰もいないということはないから。

礼装に搭載してある連絡機器の類を起動しても、カルデアとの通信は当然のように行えない。ホワイトノイズのような耳障りな音が流れるだけである。しかしカルデアと連絡がつかないことは今まで何度もあった。そのいずれも諦観に伏したことはなかったはずだ。

……………そして今まで彼の旅路を助けてくれた者たちは誰であったか。

（まずは協力してくれそうなサーバントを見つけよう。ここが仮に異聞帯だとしたら、これまで通りサーバントが召喚されているはず）

立香のとりあえずの方針は決まった。そしてその前にすべきこと、それはズバリ情報収集である。

もし外が特殊な対策をしなければならぬ世界であったとき。立香は最悪の場合即死するかもしれない。考えすぎともいえるが、今現在頼れるものは己のみである。考えすぎるに越したことはないのだ。

「まあ姉弟ブラザーの言うことは少し大げさだけどね。文明レベルとか生活の利便性とかが軒並み中世レベルまで落ち込んだだけで、まだ理論上は2000万人近くの人が生き残ってる。不定期だけどラジオとかでもたまに情報が入ってくるから、まだギリ日本って感じ」

「国のトップから末端に至るまで殆どの組織が解体されてるのにギリも何もないんだが……まあ鈴華の言っていることもある意味正しい。人あるところに国在りっていうんなら、日本はまだ滅んじやいない」「おー、中々良いこと言うねえ」

「そりやどうも」

「……日本に。この世界に何があったか、聞いてもいい？」

立香がそれを聞いたのは当然の帰結だった。保健室の窓から覗く程度でもわかってしまうほどに再起不能になった都市は、スーパーセルや空想樹だけが要因ではないはずだ。

これが仮に異聞帯の王、若しくはクリプターのサーヴァントが実行犯だとした場合、この被害は小さすぎる。これらの惨劇は確かに超常の力によるものではあるのだが、正直戦闘特化したサーヴァントであれば誰しも作れそうなものである。

根拠はまだある。コンクリートに残された破壊痕。あれは意図的なものではない、何か巨大な生物が歩行した際に出来たクレーターのそれに近い。

そこから導き出される結論は――、

「それでは、この2年で変わり果てた日本に何があったか。俺が懇切丁寧にわかりやすく講義してさしあげましょう。あ、鈴華はもう戻ってていいぞ。てか早く保存食の確保してこい。俺たちの今後の食生活がかかった大事な任務だ」

「アイアイサー、姉弟ブラザー！……また後で会おうね立香！」

ガラガラとドアを壊す勢いで駆け出した鈴華に焰は苦笑いした。廊下を走ってはいけないというルールは生憎と彼女の頭には存在しないらしい。

「とりあえず移動するぞ。2階に会議室がある。俺も一から説明するとなるとさすがに言葉だけじゃつらいものがあるからな。もう動けるだろ？」

「うん。おかげさまで」

「じゃあ行くぞ。割と歩くと思うけど、また倒れそうになったら言うんだぞ？」

わかったと頷き、立香は少しだけ名残惜しく感じながらもベッドから出る。足元にある靴——立香が気を失う前に履いていたものと同じものだ——を履いたことを確認した焰は、部屋の電気を消して会議室に向かうべく歩き出した。

*

「——それは約2年前に突如として現れた。超弩級のスーパーセルは瞬く間に日本全域を覆い、正体不明の巨大樹木は首都を穿つようにして天高く聳え立っていた」

ホワイトボードにデカデカと『強制鎖国事件(俗称)』と書いた焰は、これが俗にいう強制鎖国事件ってやつな。と補足する。

「スーパーセルによって日本を取り囲むようにしてできた嵐の壁は、物理的・電磁氣的に日本を閉じ込めた。それだけでも大混乱だったのに、それに加えて大気圏にまで届くってレベルの超々巨大樹木まで出現。生物学的にも物理的にもあり得ないその正体不明の巨大質量は当時の国民の混乱をさらに助長させた。——当時の阿鼻叫喚具合は、さながら地獄の巷ちまただったよ」

それらは全て、今までの異聞帯の特徴とほぼ同じものだ。

異聞帯を取り囲むように発生しているスーパーセルは、オーロラを伴っている影響から電磁波による外部・内部干渉を完全に拒絶。また嵐の壁自体も、鋼鉄を振り切りあらゆる物体を破壊する踏破不可能と

いう厄介極まりない性質をもつものである。

現状では空想樹を伐採する、若しくは虚数空間を通って回避する以外に解決策は見つかっていない上、その両者もカルデアの桁外れの技術力や「万能の天才」の尽力あってこそのものである。それを現代の——それも事実上の鎖国状態である日本に求めるといえるのはあまりにも酷な話だ。

「まあ巨大樹木に関しては便宜上樹木って表現してるだけだ。実際は木材どころか、そもそもこの星に存在する物質なのかどうかってレベルで得体のしれない代物だったからな。一説じゃこの星の物理法則に縛られない未知の宇宙生命体って噂もあった」

「宇宙人ならぬ宇宙植物みたいな感じ？」

「そうそう。この惨劇も宇宙人が地球を侵略するための作戦なんだってな。非科学的だと鼻で笑うような輩も、固唾を飲み込んでマジかマジかと騒ぐ有様だ。……………ぶっちゃけ俺もそのうちの一人だったよ」

意外といい線いってるなあ、と見当違いな感想を心中で述べつつ、立香は再び話を聞く姿勢へと戻った。

「そして何もないまま1年が過ぎた。……………本当に何も起きなかった。依然として日本は嵐の壁に囲まれて他国にSOSすら送ることができないままだったし、例の樹が何かしらのアクションを起こすこともなかった。強いて言えばさっきも軽く言った通り経済や市場価格が完膚なきまでに崩壊。当然外国からの食品輸入もないからもうあちこち大暴騰の嵐だ。いつそのこと別の国を新しく作った方が早いってレベルの混迷だったよ」

日本の食料自給率は戦後を境に低迷し、2000年以降は40%前後にまで落ち込んだ。つまるところ日本は日常生活に於ける食材の供給、その60%を諸外国からの輸入で賄っているという計算になる。それがもしもある日突然輸入が完全に止まってしまったらどうなるか。

野菜やパン・米・麺類などといった主食類は軒並み暴騰し、需要と供給のバランスは崩壊。日本経済は大打撃を受けて再起不能なまで

の大恐慌が訪れるだろう。街は失業者で溢れかえり、自殺者も急増。世界恐慌にて発生した大不景気以上の惨劇が繰り広げられることになる。

しかしそれは経済を維持する前提での話だ。現代人としての当たり前を捨てる覚悟をすれば。ともすれば食い繋ぐことはできるかもしれない。

……いずれもたらればの話ではあるが、状況全てが絶望に満ちているわけではないという意味では不幸中の幸いと言えなくもない。

閑話休題。

「そして今から7ヶ月前——強制鎖国事件から約1年後のことだ。政府は現状を打開するための一大プロジェクトを提示した。それが『環境制御塔建設計画』。この国が荒廃した直接の原因であり史上最悪手と揶揄された、国家直々プレゼンの一大プロジェクトだ」

「——環境、制御塔」

環境制御塔。この星の自然環境を掌握・支配し、あらゆる自然由来の事象を人間のコントロール下に置くことができるという人類史上最高の発明。それを実現化し、実用段階にまで持ち込むことに成功したというのが政府の発表だという。

「環境制御塔計画の発表はそれはもう大好評だった。完成さえすればあの嵐の壁を取っ払えるだけじゃない。人類が今まで挑戦してきた数々の問題を一笑に付すかの如く簡単に解消できる人類史上最高の発明だと、そう明言した」

立香は言葉を失った。これがダ・ヴィンチやシオンであれば絶句を通り越して謎の舞をしだしてもおかしくないだろう。

あらゆる困難や試練を乗り越えてきた人類ではあるが、今まで大自然に——ひいては自然災害にだけは叶わなかった。津波で築き上げてきた文明が全て消え去るのも珍しいことではない。まして人類が台風や地震といった天災に抗う術を持ち始めたのは、長い人類史から見たらごくごく最近の話だ。

自然環境の掌握・支配。それはつまるところ人類がこの星に存在する恩恵全てを修めたという証明に他ならない。

しかし、それは非常に歪な技術革命であることをも同時に示唆していた。焰の話が真実だとするのなら、その技術は人類が今後100年をかけても実現することのできないオーバーテクノロジーだ。2000年代の日本が持ち出すにはあまりにも荒唐無稽が過ぎると、平時であれば嘲笑と失望の大バッシング間違いなしである。

——その技術を日本はものにした。

何故それを日本が。それも他国とネットワークを繋ぐことができない事実上再起不能に陥った島国が実現できたのか。その技術や原理は公開されていない為、如何にしてそこまでたどり着いたのかは不明だ。

しかしそこには、間違いなく後ろ暗い事実や、隠匿しなければならぬ何かがある。というのが焰の見解である。

「土地問題や人権問題。法整備等々の社会的問題を全部すっばかしたとしても建築に必要な技術力は日本には存在しない。というかどこの世界にも存在するはずがない。建築学的観点から見てもそんなものを作るわけがないし、資材や機材、工事するにあたっての人員募集はどうする。と、このように星の数ほどの問題を抱えているのにも関わらず、計画は実行段階まで強行された。はっきり言って黒すぎる。RGBオール0並みに真っ黒だ」

国家の陰謀論的何かをフィクション以外で感じる日が来るとは思わなかったな。と軽口をたたきながらも焰は話を続ける。

「環境制御塔の完成は半年後。いつ終わるとも知れない地獄のような生活にもようやく光明が見えたと人々は活気を取り戻した。……が、最終的に環境制御塔設計計画は失敗に終わった」

「失敗したの？ どうして？」

「わからない。政府の奴らは只々『兎に角建設は失敗した』の一点張り。馬鹿の一つ覚えみたい毎日常名前も知らない政治家が謝り倒してたよ。そして——……、」

——忘れもしない。本当の絶望とは。地獄とはこんなものではないのだと思いきらされたあの日。

これまでの大混乱なんぞ序章に過ぎなかったのだと知らしめられ

た大事件。

「その1か月後。今まで何の反応もなかった樹は、突如として謎の水
晶に覆われた。俺たちはこの事件をこう呼んでる。――
アストラル・パンデミック
星辰大感染と」

第1節 八つ目の異聞帯（3／3）

「とある粒子体が引き起こすその奇病は、あらゆる動植物に感染して猛威を振るつた。症状は急激な高熱、頭痛、悪寒。その後口や喉に発疹が現れて全身に広がっていき、ほぼ100%死ぬ。主な感染経路は空気感染、飛沫感染、媒介物感染。日本人口の約8割を死に追いやつた史上最悪の人災。それが星^{アストラル}辰^{パンデミック}大感染だ」

それが半年で8000万人もの人間が命を落とした大災害の正体である。立香は荒廃した街並みが人的被害に比例していないことに疑問を抱いていたが、その疑問に対する回答がこれだ。

人類は古今東西、あらゆる病氣と闘ってきた。全人類の数割が死に絶えたとされる黒^{ペスト}死病大流行。史実に於いて唯一根絶に成功した天然痘。近代で尚も猛威を振るい、未だ治療法が確立されていない狂犬病。AIDS、梅毒、結核。そのいずれをも、人類は抗い勝利してきた。ある時は一人の天才が。ある時は平凡な農夫が。ある時は巨大^Wな組織^Hが。

しかし人類は敗北した。今までの功績を、偉業を、その軌跡を嘲笑いながら。お前たちは負けたのだと。今に至る研鑽の積み重ねなど無意味なのだど吐き捨てられた。

「それを境に、日本という国は雪崩れ込むように崩壊していったよ。現代兵器をもつともしない5メートル大の怪牛やあらゆる金属を腐食させる毒を吐く八又の蛇、音速を超えて駆ける狗に戦車を軽々と持ち上げる大鷲。ただ存在するだけで甚大な被害を及ぼすような化け物共が何処からともなくわんさか現れる。外に出たら死に、屋内にいてもやつらの気紛れ一つでぺしゃんこ。……鈴華はまだ日本は大丈夫だなんて言ってたが、俺は時間の問題だと思ってる。もう日本に、世界に逃げ場はない。——人類は負けたんだ。」

「そんなの——……………」

立香は何も言えなかった。慰めも、同情も、義憤も、彼はそれを伝えられない。——伝えてはいけない。

たった今聞いた地獄の一端を経験した当事者に向かって、何を言え

というのか。

大変だったね。かわいいそうに。なんてひどい。それらの言葉だけで分かった気になって、優しさを理不尽に押し付けるだけの行為は、決して優しきとは言わない。自分は安全圏でぬくぬくと過ごしているのに、日々を生きるのに必死な者に対して偽善で施しを与える。――それを侮辱と言わずしてなんという。

「だが――、俺たちはまだ生きている」

焰は不敵に笑う。

「生きている以上、抗うことはできる」

拳を固く握りしめ、希望はまだ失われていないのだと。

「人間様嘗めんな。いついかなる時代にだって、諦めなかったから今がある」

立香は見た。逆境にて輝く一条の星を。

「さて。改めて自己紹介をしようか」

古今東西を奔走し、世界を救わんとたった一人で強大な敵に立ち向かい続ける彼だからこそそれに気付けた。

「^{3rd, nano}三種星辰粒子体研究の第一人者――西郷焰だ」

西郷焰は、現代に生きる英雄である。

*

「さて。今度は俺のターンってことでいいよな？」

ホワイトボードに書かれたあれやこれを消しながら、立香に問いかける。『次は俺がお前に質問をする番だ』と暗に言う焰の表情は、あまり友好的なそれには見えない。それどころか明らかに立香を疑っているらしい。

……だというのに。ここまで懇切丁寧に説明を行ったその真意はどこにあるのか。

「こんな」時世だからな。お前に後ろ暗いなにかがあるのかないのかわからないわからなきややってられない。その上で丁寧に日本の現状を教えたその理由を察してもらいたいね」

立香は思わず「あはは……」とから笑いをこぼす。信頼してやったんだからお前もそれなりの誠意を見せろとは、中々に強気な物言いである。尤もその好意がなければ立香は漏れなく死んでいた可能性が高いので何も言える立場ではないのだが。

そもそも、立香でさえ現状を詳しく把握しているわけではないのだ。話に聞いた空想樹らしきものにスーパーセル。それらの少ない情報から此処を異聞帯(仮)と認定しているだけである。それも存在しない第八の異聞帯に、つい2年前に発生したばかりの空想樹。現状を鑑みるに、この一連の騒動の8割近くは空想樹に起因しているといつて差し支えないだろう。しかしこの仮説には致命的かつ重大な論理破綻が存在する。

異聞帯は空想樹がなければ成り立たない。これは4つの異聞帯にも共通していたことから絶対の法則ルールであることがわかる。同じく、可能性の多くを失い剪定された世界のいずれか”であることも共通している。ではこの近代日本——立香の世界とほとんど何も変わらない世界に於ける分岐点とは何か。焰から聞いた話によると、空想樹が現れるまでは至つて普通の近代社会を築けていたという。

仮に空想樹が出現したことが分岐点だとするのならば、それは酷い矛盾だ。空想樹は飽く迄も剪定された世界群の何れかを異聞帯にするのであつて、存在しない世界を異聞帯にするのではない。

とはいえ。それは立香自身の境遇を説明しない理由にはならない。未だこの異変の輪郭が見えないので待つていてほしいというのはあまりに凶々しく、焰の信用を切つて捨てるような行為である。

普段であればダ・ヴィンチちゃんやホームズ等の適任者がいるのだが、いないものは仕方がない。ないもの頼りをして問題を解決できるのであればだれも苦勞はしないのだ。

何から話せばいいか。どこまで話せばいいかを慎重に整理し、それを口に出そうとした立香の行動は、しかし予想外の第三者によって阻まれることとなる。

『聞こえ———すか、もし———……、———願います』

「ん？ 何だ、何処から声が———」

『繰り返す。もしも聞こえ——あ、ちよつ、落ち着い——』

『先輩！ ご無事ですか!?』

『マッシュ!!』

『ようし、今度こそ完璧につなりました！ あーあー、マイクチエツクマイクチエツク。調子は如何ですか、立香さん』

『俺は大丈夫。マッシュは大丈夫なの?』

『やあ立香くん。此方は君が目覚めないこと以外は何にも心配事はなかったぜ』

『そつか。——よかった』

『生憎、新所長は今休憩中だけどね。私には部下の安全をその目で確認する義務があるーって私たちと一緒になって手伝いを担ってくれたよ。……つい数時間前に限界がきて夢の世界に旅立ってしまったけれどね。なんとも運のない男だよ』

カルデアの通信礼装からはカルデアの面々の声がする。いずれも立香の身を案じるものだ。皆が皆、疲労しまくっています！ といった声音ではあるが、どうやらノウム・カルデアの方に異常はないらしい。

「あー……その、割って入るようで悪いんだが、これはいったいどういう状況だ?」

焰は気まずそうに会話に割り込んだ。そもそもからして割り込んできたのはカルデアにいる彼らではあるのだが、それを言っても仕方のないことである。

『おや、もしかしてお取込み中だった?』

「今現在進行形で立香が何者なのか絶賛尋問中だよ。これまでの会話で悪いヤツではないってわかったから、やってるのは尋問とは名ばかりの情報共有みたいなものだけどな」

『——彼については私がそれを教えよう』

ホームズは刹那の逡巡の後、立香の立場——及び自分たちがどういった存在なのかを語りだす。

『そこにいるミスター藤丸は人理継続保障機関フィニス・カルデアに所属しているマスター……そうだな……一番近い意味としては指揮

官といったところかな』

「カルデア——占星術の一族のカルデア人に肖あやってるのか？」

『ほう？ その名を聞いただけで瞬時に歴史との結びつきができるとは。随分と博識だ』

「見え透いたお世辞をどうも。知っていたのは殆ど偶然だけだな」

『いや、素直に感心しただけだよ。そちらの世界がどうかは知らないが、日本の学生はあまり勤勉であるというイメージがなくてね』

「ああ……確かに」

『——話を戻そう。我々は100年後の人類社会の存続を保障する為につくられた組織だ。まあ早い話、世界を救う秘密結社であると捉えてもらって構わない』

「人類社会の存続、ねえ……」

「だったらどうして今まで静観していた——という激情を理性で抑え込む。その世界を救うための機関に所属している立香——それもある程度重要な立場に存在しているらしい——が日本の時勢について何も知らなかったことから、カルデアとやらはこちらの惨状を把握していない可能性があることは簡単に推理できる。」

「つまりアンタらの目的は拉致された立香を連れ戻すことって認識であってるか？」

『纏めるとそうなるな』

「なるほどな」

自分の想像以上に立香が重要人物であったことに焰は目頭を押さえて苦悩する。それならせめてもう少しらしい態度や雰囲気をしてくれと心中で愚痴る。

『次は其方の状況を教えてほしい。急かすようで悪いが、我々としてはいち早く事態の收拾をつけたくてね』

「……………今さつき。マジの今さつき立香に教えたばつかなんだが？」

『現地人から語られる方が得られる情報量は格段に多い。そう思わないかね？』

ガシガシと頭を掻きながら、かたたりいなという言葉と共に焰は再

びホワイトボードに磁石でくっついていてペンに手を伸ばした。
「ったく……。仕方ないからもう一回だけ説明してやるよ」
　　なんやかんや言いつつ、お人好しな焰であった。

第2節 星の恩恵を宿すモノ（1／2）

ネク・プルス・ウルティマ。世界の果て——ジブラルタル海峡のさ
らに向こうには何も無いというある種の警告のような意味合いを込
められたこの言葉は、カルロス一世によって違う解釈へと変わって
いった。

“世界の果てをも超えてさらに進め”。ヘラクレスの柱を旗印に
しているスペインは、此れをモットーとして採用している。リスクを
冒してでも前進する勇氣を持って。実に情熱の国らしいとも言うべき
思想である。

だが、これにはもう一つ知られざる別の解釈がある。

“Non Plus Ultra”——人類に許された制限を
決して超えることなかれ。世界の果てを超えるということ、其れ即ち
“神への反逆”也。

ジブラルタル海峡を越えた先にあるとされたアトランティス大陸
は、資源に富んでいた。生活水準は極めて高く、高度な文明を築いて
いたと言い伝えられている。その結果、アトランティスの民は神への
敬いを忘れたのだ。神の恩恵無くして日々を悠々自適に暮らせるだ
けの技術を得てしまったが故の傲慢だった。

結果として、アトランティス大陸は神の怒りによって沈んだ。神が
人に定めた領域を超えた罰として——人が世界の果てを超えたらど
うなるかという見せしめとして。

“Non Plus Ultra”。神が人に与え給うた領域
を超えた先に待っているのは、かのアトランティス大陸と同じ末路で
ある。故に立ち去れ。

——ハ。では神々はアレを許容したということか？

ガイアの末子は問う。

——かつてミノアの王が犯した愚行を……父なる神は許したと？
あの悍ましい実験の数々を。零れ落ちた悲痛の涙を。彼の神は見
て見ぬふりをしたと？

怒りで震える拳を、齒を噛みしめて抑える。ギシギシと奥歯が擦

れ、それに呼応するように世界が震えていた。

——ふぎけるなッ!!! 神々の王の名が、人類の守護者の名が聞いて呆れる! アレはいずれ必ず世界を破滅に導く終末の芽だ!

怒号。かつて世界を滅ぼさんとした力の一端が漏れ出たことで、世界の法則が軋み歪む。

——奴らには霊長を名乗るだけの資格はない。……かつて俺が見逃したばかりに、人類は途轍もなく歪で醜い進化を遂げてしまった。

俺が怠惰であつたばかりに人類がこうなつてしまったというのであれば。俺が責任を果たすのが道理というものだ。

——故に俺が滅ぼそう。故に俺が塵殺おうぎつしよう。一条の救いすらない地獄の怨嗟を以て、貴様らは滅尽されるのだッ!!!

『突如発生した巨大な樹。スーパーセルの檻。星^{アストラル・パンデミック}辰大感染。なるほど』

日本異聞帯（仮）の現状を知ったカルデア首脳陣は、その想像をはるかに超える状況の悪さに言葉を上手く紡ぐことができなっていた。

『半年で8000万人もの死人が出たとすると、大体1日に43万人もの人が命を落としているという計算になります。こんなの………惨むじいにもほどがあります……!』

「現実を言葉にすると、俺たちもよく生き残れているなと思うよ。それか、俺たちは既に狂つてしまつて、地獄を地獄と思えなくなつてただけなのかもな」

8000万人の死。それは比喻無しに人類が滅亡するかどうかという歴史的大事件だ。

黒死病という感染症がある。

歴史上最悪の疫病といつても過言ではない黒死病は、14世紀に蔓延し猛威を振るつた。太陽が寒冷期であることや当時の衛生観念の

杜撰^{ずさん}さ等の様々な要因が重なった結果、8000万もの命が死に絶えたとされている。

町村は死臭や死体で溢れかえり、信仰は廃れ、飢えや黒死病に苦しむ人々の声は怨嗟となつて歴史に刻み込まれたのだ。

星辰大感染の場合は、きつとこれより酷い有様なのだろう。半年で8000万人が命を落としたとして、その死体を葬る人間は足りるのか。埋めるとしたら土地はあるのか。そもそも葬る側が死体経由で感染しないとも限らないのだ。

街並みが死で溢れかえる——成程、地獄のちまたとはよく言ったものだ。

『ミスター西郷、質問をしてもいいかね?』

「俺にわかる範囲でいいなら」

『ありがとう』

焰は快諾しながらふと時計を見る。時計の針が示す現在時刻は17時だ。立香が目覚めてここに来たのが昼食後——大体13時過ぎくらいなので、都合4時間はこの会議室に籠りっぱなしということになる。

『先ほど君は、^{アストラル・バンドミック}星辰大感染は史上最悪の人災である』と言ったね?

それはつまり、8000万もの人が死んだ悲劇の原因は人間にある

——そういう認識で合っているね?』

「……………残念なことに、肯定だ」

できれば外れてほしかったよ、とホームズは苦笑を零す。

『人の手……………そ、それはつまり、日本は人類の手によって滅びたということですか!?!』

「あの樹を覆っている結晶体は星辰粒子体というナノマシンが結晶化したもので、その星辰粒子体は某機関によつて研究されていたものだ。つまり日本をこんな状態にしたのは、直接的にしる間接的にしるその機関つてことになる」

その言葉は立香やマシユ、かつて人類救済を目指した彼らをして到底許せるものではなかった。

人理修復の旅——人類を救う為に文字通り古今東西を駆けた彼ら

の旅路の、そのすべてを無に帰し嘲笑うが如き所業。人類は人類の手を以て滅びるといっているのであれば、人類悪——“憐憫の獣”や“原初の母”等のビーストたちを退け、人類は正しく未来を生きることができると信じたカルデアの奔走はいったいなんだったのか。

「星辰粒子体を研究していた機関は何らかの手段で国と手を取り合つて環境制御塔を建設。そして失敗し、星辰粒子体が暴走した果てがこの有様。っていうのが、俺たち研究チームの仮説だ。バイオハザードみたいなもんだよ。厳密には星辰粒子体はウイルスではないから、この表現は間違ってるけど」

『……そもそもの話なんです、星辰粒子体って何なんです？ 環境制御塔から散布されたという話ですが。どんな失敗だったとしても、まったく無関係かつ有害なものをまき散らすなんて杜撰な管理を現代社会に生きる人々がするとは思えないんです。であればその星辰粒子体とやらは元々散布する予定のものだったと考えるのが自然です』

シオンは星辰粒子体には環境制御塔の根幹を成す重要な何かしらの要素が存在すると確信している。彼女の言う通り、その粒子体が存在することを除けばこの世界は汎人類史の日本と殆ど同一だ。

彼女の問いに対し、焰はこう応えた。

「結論から言うと、第三種^{3S, nano machine unit}星辰粒子体は外部からの補給無しに駆動し、無限のエネルギーを放出し続けるナノマシン——俗に言う“永久機関”というやつだ」

場の空気が静寂に満ちる。焰の言葉に含まれている情報量はかの万能の天才やシャーロック・ホームズですらも容易に受け入れ難いものらしい。

それもそのはずだ。人類はこれまでめざましい発展を遂げてきたものの、古来より未だに完成の目途すらたたない概念の一つが永久機関なのだから。

熱力学^{第二}の第二法則^{永久機関}の否定。それは人類が“証明不可能”と判断し、マクスウェルの悪魔という形に落とし込んだ前人未踏の領域である。

熱力学の第二法則……即ちエントロピー増大則の否定こそがマク

スウエルの悪魔そのものであるのだが、この悪魔は存在しないことが証明されているのだ。

詳しい説明は省くが、要約すると悪魔が暖と寒を司るためには観測したことを抹消する為のエネルギーが必要であり、しかしそれは外部からエネルギーを供給されていることにつながるためにこの思考実験は矛盾する。というものだ。

「星辰粒子体は『1秒の定義』——主にクォーツ時計なんか用いられる32.768kHzの周波数に反応して寄生した生物の体内経路を等速で約三十三万回転するという性質を持つ。光の伝搬法則の時間概念を超えて行われる等速運動は、架空粒子や第五架空元素を物質界で観測するために必要な多元運動量を生み出すことができる。この性質が星辰粒子体を第三の永久機関へと押し上げている根幹を成していると言つてもいい」

国の為政者が挙つてスーパーセル級のエネルギーを操れると豪語した根拠がこれだ。『1秒の定義』に則り、空間概念に対して等速三十三万回転することで既存の宇宙の運動量を超えることができる星辰粒子体は、使いようによつては太陽の光冠程の超質量を瞬時に生み出すことが可能である。原子力発電など到底及ばない莫大なエネルギーの供給は、この日本のみならず世界中のエネルギー問題を解決することが可能だ。

「その他にももう一つ。星辰粒子体には寄生した生物の細胞を粒子体に合わせて変質させていく特性がある。寄生された宿主の体の細胞は、あちこちがバグつて最終的に生命維持すらできなくなつて死に至るつて話だ」

これこそが半年で8000万もの命を奪つた最大の要因である。星辰粒子体に感染した者の身体は、星辰粒子体が稼働できる環境に強制的に変質させられるのだ。メカニズムとしてはがん細胞が発生するそれに近いと言つてもいい。

そして致死率が100%に等しいのもこの性質に起因する。これは単純な話、血液型の一致しないドナーの臓器を移植して拒絶反応によつて死ぬようなものだ。極々稀に身体の変化に拒絶反応を示さな

い者がいるからこそ、致死率は完全に100%にはならない。

「といっても、血液・体液曝露や星辰粒子体に感染した生物を摂取しないと感染まではいかない。ここまで被害が広がったのも、その9割以上が媒介物感染が理由って話だ。環境制御塔の周辺並みに大気中のナノマシン濃度が高い場所でなければ空気感染はしないし、飛沫感染も同様。半年前と違って大気中のナノマシン濃度は周囲の動植物に吸収されてかなり薄くなってるから、これでもかなり死亡率は減ったほうなんだぜ？」

『なるほどなるほど。つまり星辰粒子体とは全く新しい第三の永久機関であるとともに、今の日本の人々を殺戮しまくっているオーバーテクノロジーの極致ということですね』

『その話が真実であれば、確かに理論上は地球という星の自然環境を支配することは可能だろうね。でも結果的にその計画は失敗。完成したのは殺人ナノマシンを散布する最悪の殺戮兵器というわけだ』

世界を救わんと奔走した技術者たちの研鑽の結晶である環境制御塔は、今や人類の存亡を脅かす史上最悪の巨塔となってしまうている。それは酷い皮肉な話だ。

『ミスター西郷。君はこう言ったね？ “星辰粒子体には寄生した生物の細胞を粒子体に合わせて変質させていく特性がある”と。この言葉から察するに、星辰粒子体は特定の環境下でしか効力を発揮しない。という認識で間違いないかね？』

「ああ。星辰粒子体は寄生した宿主の体内環境に適した形に変質させる。ある条件を満たした環境でなければ等速運動は起こり得ない。という認識は正しい」

『ではその適した環境というのは何を指すか。これが植物や昆虫類であれば感染した人間は例外なく全員死ぬはずだ。身体の一部を別の動植物とのキメラにされて正常に生きていられる人間は人類学的にあり得ない。だが君はこうも言った。“ほぼ100%死ぬ”。——これは裏を返せば“コンマ以下の割合で生き残った者もいた”ということでは？』

「……………何が言いたい」

刹那の逡巡。その果てに、ホームズは言葉を紡いだ。

『今回の環境制御塔暴走事件によって散布された粒子体は、元々は誰の身体に宿っていたのか。私の推理が正しければ……そこには人柱となった誰かがいたはずだ』

第2節 星の恩恵を宿すモノ（2／2）

ヒントは至る所に転がっていた。国直属のプロジェクトとはいえその一切の情報が明かされなかったこと。日本の技術体系に対して明らかに比例していない技術進歩。寄生されたが最後、体の一部が他生物の細胞に置換されてしまうというのに極々僅かでも生存者がいたこと。

環境制御塔——とすれば星辰粒子体開発の過程で人道に反する非道徳的な実験の数々が行われていたことを想像するのは容易だった。この一連の騒動には、かつて人類が犯した禁忌……人体実験が絡んでいるとホームズは確信している。

『為政者による情報の隠匿、国直々の開発、技術体系の歪さ。これらすべてを繋ぎ合わせることで自ずと見えてくるその真実に、君は薄々気付いているのだろうか？』

「——それは、」

普段の彼からは想像もつかないほどに憤慨している——取り乱しているといつてもいいくらいだ——ホームズは、焰を責め立てる。ここで焰に何かを言っても何も変わらないのはホームズもわかっているはずなのだ。それなのにホームズは感情任せに糾弾する。お前たちはこれまでの歴史の積み重ねを無駄と唾棄するのかと。

我ら英雄が何のために古今東西を駆け回ったのかを知らぬ存ぜぬと吠える愚者共に問う。

「ホームズ」

『……失礼。少々取り乱してしまった。私らしくもない。申し訳なかった、ミスター西郷』

「言い逃れはしない。星辰粒子体研究の根幹に人体実験の陰が見え隠れしているのは事実だし、そういう意味では俺たちは踏み越えちゃいけない領域を超えてしまった愚か者の世代だ』

この地獄は天罰なのかもなど、焰は自嘲気味に言い放つ。

アストラル・パンデミック
星辰大感染の裏でどんな悪逆非道な所業が為されていたかは彼自身知らない。しかし焰は確信していた。この事件の黒幕は——粒子

体研究の関係者たちは人の心を持たぬ悪鬼ばかりであると。

『ゴホン。話を換えさせてもらおうよ』

ホームズと焰の仲がこれ以上に悪化させないためだろう。ダ・ヴィンチは咳払いをし、少々強引に話に割り込んだ。

『君は何処からともなく化け物共が現れたと言っていたね。それは星辰粒子体を研究していた機関のモルモットという可能性は無いのかな?』

「否定はできないが肯定もできない。死体があればそこから調べることはできるが、あいつ等を殺すのは通常の火器じゃ不可能だ。最低でも対物ライフル級の火力無けりや傷すらつけられない上に1日たてば傷口が完全にふさがってる」

——ただ、と焰は続ける。

「某研究機関が関わってる可能性はかなり高いと思ってる。粒子体に感染しても死なない、あるいはそもそも感染しない自然由来の生物がいてたまるか。その機関のモルモットと考えるのが自然だろう」

粒子体の元々の宿主が人間であると仮定した場合、感染した動物は100%死ぬ。この仮説が正しかった場合、焰の言う「規格外の怪物」という存在そのものが矛盾してしまう。人の心臓がある日突然牛の心臓と入れ替わってしまったら死んでしまうのと同じく、他種族のDNAを基に作り替えられた身体が適合するわけがない。そこから導き出される結論が、同じ研究機関による動物実験であったというだけだ。

『星辰粒子体の造り方がわからない以上何ともいえませんが、その可能性はありえない話ではないかと。文字通り無限のエネルギーを供給する未知のナノマシン——その影響で遺伝子異常が起きて通常じゃあり得ない進化を遂げた生物がいてもおかしくないと思います』

『焰くん。現状わかってるその怪物たちの特徴を教えてくださいもいいかな?』

「あー、それは構わないんだが……そろそろ鈴華が食料調達から戻ってくる頃合いだから、夕食の後でもいいか?」

時計は19時を指していた。こうして話を始めてからかなりの時

間が経っている。

「俺も少しお腹減ったかも」

『ふむ——通信も安定しているし、とりあえずは立香くんの安全は確認できた。一応通信待機状態にしておくけど、有事の際はすぐに連絡すること。何せ君がいる場所は完全な異世界だ。我々でも何が起きるかわからないからね』

「異世界?」

『その話もまとめて話すよ。ではまた後で』

「うん、また後で」

*

「おそいぞー姉弟!」
ブラザー

がるる! と今にも噛みつきそうな勢いな鈴華がカレー片手に憤っていた。しかし立香と焰には、そんなことを気にしている余裕はなかった。

何故ならば。彼女の両手から漂うカレーの匂いは空きっ腹にポディーブローを決めるが如く、強烈な食欲増進剤として立香と焰を襲ったからである。空腹時のカレーに勝る御馳走なぞ無いのだ。

「悪かった。色々あつて遅れた」

「何々、エロスと浪漫について語り合つてたら遅れた? それなら仕方ないな! 姉弟も立香もそういうお年頃だからね!」

「そうそう。ちよつと性癖フェチの話とか」

「してねえよ! お前も悪乗りするな!」

「姉弟は年上好きだよ」

「なんで知つ——じゃなくて! 悪乗りしなくていいから!!」

焰の癖を無慈悲に暴露しつつ、大きめの紙皿に盛られたカレーと冷えた飲料水をテーブルに並べる。生活用水を必要最低限にする為か、いずれも使い捨てできるタイプの食器だ。

「わざわざ○印のレトルトカレーを調達したきたんだ。しばらくはカレー三昧だけど、味のバリエーションが豊富だから多分飽きることは

ないと思う」

「無〇のカレーは美味しいよね！ レトルトだから結構日持ちもするし」

「とりあえず、さっさと食べようぜ。もうお腹が減って仕方ないんだ」

「それもそうだねと焔に同調した立香と鈴華は、いただきます！ と元気の良い食膳の議を済ませた。そしてプラスチック製のスプーンを手に取り、盛大にカレーにかぶりつく。

「美味しいー！」

「近年は保存性だけじゃなく味も考えてつくられてるものも多いからな。何せここは災害大国日本。必要になる機会が多い非常食に注ぐ力は他国の追隨を許さない程に大きい」

ローリンググストックという言葉がある。賞味期限切れ間近の食品や消費したものをそのたびに備え付け、非常食を常に一定数確保しておくという和製英語だ。農林水産省監修の基、あらゆる企業が推奨しているローリンググストック法。常に天災と隣り合わせであるからこそ生まれたその概念は、日本特有のものなのだ。

焔の言うように、最近は避難生活で飽きないように、かつアレルギーを持つ者が選択の幅を広げられるようにと創意工夫をなされた保存食も数多存在する。尤も、栄養面だけで言えば乾パンやビスケット等で十分賄える。が、ストレスを食欲で緩和する為にはそれらは少々役不足と言わざるを得ない。

「俺はこういった歴史的なあれやこれは専門外だから、本当に知ってることしか知らないけどな。うんちくとも言う」

「姉弟は理数系の成績は頂点レベルだけど、文系はもう目も当てられないモンだよ。未だに四十七都道府県を言えないしね」

「……………別に言えなくたっていいだろ。最低限主要な都市さえ覚えておけば」

「偉い人は言いました。ペンは剣よりも強しと！」

「そうそう。知識は蓄えておくことが大切なんだよ」

「それって大衆への情報伝達と直接的暴力の影響力を比較した換喩だかんゆ

ろ？ 誤用だな」

「ぶちそうさまでした！」

「ぶっそさまー！」

「話をはぐらかすんじゃない！ ってか食べるの早!？」

立香は米の一粒たりとも残っていない紙皿を、鈴華に倣ってビニール袋に捨てた。袋の中には過去に食べたであろうレトルト食品の袋や缶詰が入っている。二人で三食ということを考慮すると、およそ3〜4日分だろうか。

「そろそろゴミ袋がいっぱいになってきたかも。明日らへんにでも捨ててくるよ」

「……捨てる場所あるの？」

立香の疑問は当然の帰結であった。ゴミ収集車等が恐らく存在しない今、こうして出た生ごみはどうやって処理するのだろうか。そう考えている立香を節目に、焰はカレーを食べつつ話す。

「この学園には生活するうえで必要な施設が一通り揃い踏みしてる。浄水器とか太陽光発電とか、ビニールハウスや畑まである。ぶっちゃけた話、ここで生活することもできる」

「まあ、仮にも大学附属学園だからね。お金かけてる分、それに応じた施設が整ってるって話。あとはヤバいウイルスとかが流出しないように分厚い鉄の壁とか、対熱核兵器用シエルターなんかも搭載してるらしいよ。あと姉弟！ 食べながら喋んな!!」

「お前は俺の母親か！」

「大変仲がよろしいようで」

「ああ全くなー！」

賑やかな少年少女の喧騒は、彼らの心を癒せずとも。地獄のさなかであることを忘れさせるほどに平凡で満ち足りたものであった。

藤丸立香は世界の破壊者である。

汎人類史を存続させるため。未来を取り戻すために。既に4つの異聞帯を——空想樹を伐採してきた。

目を閉じれば今でも彼の心は囁く。お前が彼らを殺したのだ。己が生き残る為とはいえ、お前が救った者たちを自身の手で壊したの

だ。そのなんと許されざることか。
しかし。今この瞬間だけは。願わくば彼が凡そありふれた一般人
であることを――。

――反吐が出る。

第3節 世界を憎む獣（1／4）

八ツ俣またの龍王が猛る。たったそれだけの動作で、天からは土砂の如き大雨が降り注ぐ。都市のライフラインを軒並み破壊しつくす大天災はそれだけに飽き足らず、人類文明の象徴たる灰のビル群をいともたやすく薙ぎ倒した。

この世の終わり。この光景を名付けるとすればこれ以上に相応しいものはないだろう。

『滅べ。悉く、尽く、全て、総て。我が化身、我が御名みなの下に、滅ぶ可し』

周囲に人の気配はない。当然だ。この龍王が全て喰らい、薙ぎ払い、溶かしつくした。一切の慈悲はなく、ただ天の災いの下にて死んでいっただけのこと。

『我即ち神なれば。故に人よ、尋常に逝ね』

八つの頭——都合十六の瞳は血塗られたように紅く、憎悪によって煮えたぎっていた。呪詛を吐き。天を睨み。威光を穢し。地を侵し。神を喰らい。陽を呑み。星を以て、星を壊す。

此れなるは古事記にて語られる神喰らいの化生也なり。八ツ俣の頭と尾を以て人と神を陥れる禍の化身。古来より人々は、この怪物を“八俣遠呂智”八岐大蛇と名付けて恐れ崇めた。

その古の天災が現代今に蘇り人を殺し歩く。一切塵殺おろぎつを秘めながら放たれる神威に人が抗える道理はない。神と袂を分けた人々に荒れ波の化身をどうこうする手段は存在しない——はずだった。

「まさか日本屈指の大化生けしやうサマが大暴れしてるなんてな！」

声の主が立つ場所を八つの頭が睥睨へいげいする。ヤハハ！と傲岸不遜に呵々大笑する少年。この大嵐のさなかにて仁王像の如く立っているその膂力に、八岐大蛇はらしくもなく訝いぶかしむ。

それもそのはずだ。少年が今立っている場所は、最大瞬間風速100メートルという生物の存在を拒絶する絶死の世界。人は愚か、トラックや家屋などの圧倒的超質量ですら吹き飛ばされる空間で、高々60キロ程度の塵芥が存在できる道理はない。

『不愉快、不愉快。貴様、何故其処に在る』

「寧ろこつちが聞きたいくらいだ。気が付くとポストアポカリプス全開な現代日本において、土砂降りの中突っ立ってた。おかげ様で全身ずぶ濡れだぜクソツタレ」

『まあ良い。我自ら貴様を葬る喜びに咽び泣き、死ぬ』

八岐大蛇は神の御業——天を操る力を以て五つのエネルギーを構築していく。それらは次第に形を成し、色を帯びていった。相生の概念を付加された五元素は循環を繰り返し、さらに熱量が蓄積されていく。

鉄すら容易に溶かす地獄の業火。地を呑む大洪水。悉くを切り刻む絶死の風。大陸が如き質量を誇る土砂。天を覆う剣の軍勢。その膨大な神気と魔力は大地を震わせ、星そのものを慟哭させる。単体で複数の都市を更地にし得る破壊のエネルギー五つが指向性を持って少年へと牙を剥く。

アフリカゾウが蟻を踏み潰すが如きオーバーキル。大陸そのものをも破壊しかねない超常的破壊を前に少年は、
「しやらくせえ！」

——ただ思い切りブン殴った。拳を握りしめ、肩に力を込め、己に向かつてくる森羅万象の一端に向かつてそれを解き放つ。たったこれだけだ。一秒の間に数千もの拳を叩きつけたわけでも、己の全てを賭した一撃を放ったわけでもない。

『な———』

しかし、八岐大蛇の御業は少年の拳に撃ち負けた。

炎は拳圧で消し飛び、洪水は彼方へ吹き飛ばされ、風は余波の風圧で相殺され、土砂は粉々になって雨に混じり、剣は悉く碎けた。

天変地異に等しい暴力をさらに上の暴力でねじ伏せるといふ力業。八岐大蛇の御業が大陸を砕くのならば、少年の一挙一動は星を砕くものだろう。

『……阿頼耶の手足でもなく、星見の者でもなく、唯の人間が、我が御業を破る道理があるわけがない。人間——貴様何者だ？』

「ご生憎様、俺は純度100%の人間サマだ。ちなみに座右の銘は、

天は俺の上に人を創らず、ってな」

『ハ、戯言を』

侮蔑の感情がこもった十六の眼が少年の傲岸不遜さを射抜いた。八岐大蛇からすれば所詮人間は人間、猿は猿、塵芥は塵芥だ。多少力が強いからどうした、より高次元の存在たる我に敵うわけもないと。目は口ほどにものをいうということわざがあるが、どうやら神々にもこれは当てはまるらしい。

『そも、貴様は何故我に逆らう。人間を守る。我が目覚めるほどに、我が世に降り立ってしまうほどに、人間は醜い。我ら不倶戴天が人類史に姿を現した時点で、もう貴様らに救いはないのだと何故察せない』

『かつて我らが請け負った負債は、我ら神々が駆けた歴史は、総て無意味だった。我々は愚昧であった。人とはかくも醜悪だと見抜けなんだ我ら神の、なんと屈——』

「せい」

『じょッ!?!』

星を砕く膂力をして放たれた一撃が八岐大蛇の内臓組織土手っ腹に甚大な被害を及ぼす。大きめのマンションほどもある巨体が軽々と宙に浮かされているその光景は、正しく人智を超越していた。

「話が長い」

全く以て理不尽極まりない。

『か、あつ……………』

数秒の滞空を経て、大きな地鳴りと共に巨躯が地に沈んだ。いつのまにか少年の膝下まで上がっていた水が飛沫をあげて宙に舞う。言葉をついでいる途中に不意打ちされた八岐大蛇はこれに対応することもできずに、見るも無残に意識を刈り取られてしまった。

ふと雨風が止み、陽の光が水面を照らす。やはりこの異常気象の原因はコイツだったか、と彼は含み笑った。ぐしよぐしよに濡れた学ランの水分を絞り、髪を手でかきあげ、

「さて……………ここは何処だ?」

少年——逆廻十六夜は絶賛迷子中であった。

*

「異世界？」

『そう。君が今いる場所は此方とは全く異なる世界、通称異世界とも言うべき世界だ』

食後、寝支度を済ませた立香たちは各々の寝床へと別れた。立香に寝場所として宛がわれたのは一般的な教室で、寝具は非常用の毛布などを用いている。

時刻は11時を過ぎていた。人がいないのにも関わらず夜行性の動物による環境音が聞こえないことから、この世界が如何に生物に厳しいものであるかは容易に想像できるだろう。

「ドラゴンなクエストとか、ファイナルなファンタジーとか……そういうアレ？」

『ハハハ。広義的な意味では間違っていないね。某小説家が書き記したものが、架空の外宇宙的存在を証明したくらいだ。そのようなフィクションに満ちた世界が実在していても不思議じゃない』

魔神柱の一根が為した一連の事件。その根幹こそが外宇宙クトゥールの存在神話だった。ラウムはこの宇宙に絶望し、人類を救済するために他の宇宙の存在へと縋った。フォーリナーという巫女を据えて世界を変えんとした騒動は結果的にカルデアが阻止したものの、これを皮切りに外宇宙の存在による接触が増加することとなる。

『先輩は並行世界……編纂事象と剪定事象についてはご存知ですよね？』

「知ってるよ。俺たちが今戦っている異聞帯は、元々剪定事象から汲み上げたもの——だよな？」

『勤勉なようで何よりだ立香くん。私たち魔術師はこの現象を纏めて並行世界と呼んでいる』

太陽系の容量は有限であり、このまま人類が無数の分岐点を作り続ければ100年程度で消滅してしまう。剪定事象とは、最も安定した世界線から逸脱した世界——多くの可能性を失い、袋小路に迷い込ん

でしまった世界を宇宙から消去することで世界の容量を確保する一連の流れの総称だ。

『そして異世界とは何か。簡単に言うなら、私たちが存在する世界との接点が過去現在未来に於いて全く無い世界全部の事だ』

「本当に全く？」

『本当に絶無です。縁も無ければ、そもそも同じ物理法則を有しているかどうかすら定かではないブラックボックス。接点がない以上観測もできないので、所詮名ばかりの机上の空論ですね。いえ、机上の空論でしたと言うべきでしょうか』

シオンの表情が苦虫を噛み潰したように歪む。

『分かりやすく言うと立香さんは繋がるはずのない世界の接点となつて非常に存在確率が不安定になっています。正直言つて今観測しているのがこのノウム・カルデアで眠りこけている藤丸立香と同一存在であるかも怪しいです。というか今こうして会話ができていること自体がもうすでに理解の範疇を超えています。シュレディングアの猫の中身を透視してるとか一体どういう絡繰りなのでしょうかね。そもそも第三永久機関って何ですか。そんなオーバーテクノロジーが過ぎる代物が異世界とはいえ現代日本に——』

『はいはい落ち着いてー。深呼吸深呼吸』

「2割くらい理解できた！」

『大丈夫です先輩。横で見ている私も3割未満しか理解できませんでした』

哀しきかな。シオンの苦悩を理解できる者はダ・ヴィンチしかいなかったらしい。

『技術者陣が悲鳴を上げているのは一先ず置いておこう。先ず明らかにするべきなのは、ミスター藤丸は誰に、どうやって、何のために喚ばれたのか。彼を異世界に繋ぎ止めている楔は何か』

『先輩のいる世界が異聞帯なら、其処にはこれまで通り王のような存在がいるはずですよ。ですが焰さんの話を聞く限りだと、この世界の日本は汎人類史に於ける近代とほぼ同じ。剪定事象となる確率は低いのではないのでしょうか』

少なくともこれまでの異聞帯には明確に歴史の分岐点が存在していた。

A. D. 1570 隕石の落下により恒久的大寒波に見舞われたロシア。

B. C. 1000 神々の黄昏ラグナロクが正しい形で終わらず、人類の繁栄が神の手によって完全に管理されてしまった北欧。

B. C. 210 たった一人の人間のみが世を続べ、永久に続く中国。

■ 11900 黒き最後の神によって運営される創世と滅亡を繰り返し続けるインド。

このように年代にばらつきや文明レベルの高低が激しいもの、いずれもそれらの事象を引き起こした直接の原因——異聞帯の王がいた。

「なら、この世界の転換期っていつだったんだろう」

『一応トリスメギストスⅡの演算結果は、日本異聞帯の分岐点はB. C. 2000のクレタ島で発生したと算出されています。異世界だけに下手な確証を持つのは危険ですが、私たちの世界線上であったならこの年代はミノア文明——ミノタウロスの怪牛が成立した時期に近いです』

「日本の異聞帯なのにクレタ島？」

『私もそれについては疑問に感じています。紀元前2000年ごろに日本とクレタ島に因果関係があったとも思えませんし、そもそも離れすぎです。この時代に海を渡って日本に上陸するのは不可能です。神々の力を以てすればありえますが、その場合は神話に何らかの記述が残るはずですよ』

日本は極東に位置する島国の為、他国との交流が他と比べて非常に少なかった。強いて言えば中国と交流があったものの、それも弥生時代以降の話である。ユーラシア大陸とアフリカ大陸に挟まれた地中海のド真ん中に位置するクレタ島と関りを持つのは現実的ではない。『話を戻すが、今ミスター藤丸がいる世界は全く未知の領域だ。ミスター西郷の話に出てきた巨大な生物のことやクリプターのこともある

る。これらの情報を基に第一にすべきことは、戦力を揃えることだ』
立香は今サーヴァントの影を召喚できない。ここが異世界だからなのか、はたまた第三者による妨害の所為なのかは不明だ。しかしこの世界に跋扈する怪物やクリプターのこともある。どうにかして戦力を揃えなければ下手に動くこともできないのだ。

『準備ができ次第にすぐにサーヴァントをレイシフトさせるから、それまでは極力危険は避けてほしい』

「はい」

『まったく……緊迫でガチガチなのも困るけど、こうもゆるつとされるのもある意味で困らされるね』

『でも本当に無事でよかったです。今は殆ど気絶という形で寝ているゴルドルフ所長も、本当に心配していたんですよ』

「あとで所長に謝らないとね」

漸くカルデア内に漂っていた張り詰めた空気が和らいだ。一先ず現状を共有できたことや互いの認識を確認できたことで、一つの難所を乗り越えたが故だろう。

カルデアの面々をして、異世界への干渉は非常に困難を極めた。何せ理論上無限に存在する世界からただ一つの正解を見つけ出さなければいけないからだ。それは太平洋からたった一粒の砂を見つけてるが如き難易度だっただろう。

『今のところ通信は安定していますし、しばらくは問題ないと言っていいかと。明日以降の行動は此方で策を練るので、先輩はしっかりと身体を休めてください』

「お昼ごろまで気絶してただけだね」

『慣れない環境とは本人の自覚無しにストレスをため込むものだよ。眠くなくても横になるだけで大分違ってくるんだよ』

「寝ます」

『素直でよろしい。ご褒美に飴をあげよう』

「それじゃ、おやすみ」

『おやすみなさい。先輩』

プツン。通信が切れるノイズが一瞬だけ立香の耳を擦った。

彼が目覚めてまだ半日程度だ。未だ自分が異世界にいるという実感はなく、また危機的状況に陥っているという自覚も半ばしかない。

「でも、なんか少しだけ……………」

安心する、と思うのはおかしいだろうか。

荒廃しているものの、ここはかつて藤丸立香が生きていた現代日本に瓜二つだ。西郷焔、彩里鈴華という学友のような存在も、学校の教室も、それら全てが懐かしく、尊いと思うのはおかしいことだろうか。

「——頑張ろう」

藤丸立香は眠りについた。

デア内のサーヴァントを精神体の存在する世界に現界することができるのではないかとダヴィンチちゃんは考えたのだ。そしてその読みは見事的中した。

「——告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

肌がピリピリと総毛立つ威圧感と共に、彼らは現れた。

「アーラシユ、召喚に応じ馳せ参じた。よろしくなマスター」

東方の大英雄アーラシユ。アーラシユ・ザ・アーチャーという渾名を持つ生粋の弓兵。何者にも侵されぬ強靱な肉体と山をも削り取る弓の腕を併せ持つ人類史屈指の英雄は、好青年の如く快活に笑う。

「■■■■■■■■■■——！！」

半人半神の大英傑ヘラクレス。大神ゼウスの血をその身に宿す巨漢は、曰く宙をも持ち上げるとも言われる益荒男ますらおである。十二の試練を為した不撓不屈にして最強と名高い戦士は、戦いの気配に吠え猛る。

「よろ、しく。ますたー」

ミノスの怪牛アステリオス。ミノタウロスとして人理に刻まれた哀しき怪物。反英霊——悪を以て善を為す存在である彼は、己がマスターを守らんと奮起する。

「ちやんと召喚できてよかったあ……。よろしくね、アーラシユ、ヘラクレス、アステリオス」

『「先ずは成功とっていいだろうね。霊基パターンは安定しているし、記憶の相互共有もうまくいつているみたいだ。……強いて言えばアステリオスの霊基が少しだけ平常より高い数値だけど、これはまあ誤差の範疇だから安心してほしい』」

「驚いた……いやいやマジで。ぶつちやけ眉唾だと思ってたぜ」

驚天動地。焔の心情を一言で表すのであれば、これ以外に相応しい言葉はないだろう。

科学者としてかなり優秀な部類に位置する焔は、しかしその生い立

ち故に非科学的な事象については意外と懐が広い。寧ろ、そんなこともあるか」と容認するくらいには柔軟な思考をしている。

ただ、今回に関しては目にするまで半信半疑であったし、何なら不可能だと思っていた。

『といつても五分五分の賭けでしたけどね。いやあ上手くいってよかったです！ 立香さんが世界と世界の隙間にドボンしてどうにかなっちゃやう可能性も無きにしもあらずでしたからね』

『そ、そんなに危険な綱渡りをしていたのかね!？』

「フォーリナー的なあれ？」

「フォーリナー……外国人？」

何故このような状況になったのか。

それは遡ること約2時間――、

*

「英霊？」

『人類史の収束点を造り出した――即ち偉業を為した古今東西の英雄たちの陰法師。それが英霊だ』

英霊。阿頼耶抑止力が天災や超常の存在から霊長を守護する為に生み出した降霊儀式「英霊召喚」によって召喚される使い魔。カルデアにいるサーヴァントや聖杯戦争で召喚されるものは、それを人間の手で扱えるよう格落ちさせたものだ。厳密に言えば聖杯戦争とカルデアの召喚式とはまた異なる技術が用いられているのだが、ここでは割愛する。

「で、その英霊たちの手を借りて世界を救う為に日夜駆けるのがカルデア？」

『その認識で正しいとも』

「クツソ恰好いなオイ!!」

焔はわなわなと拳を震わせて立香を羨望のまなざしで睨みつける。世界を守るために日夜戦う秘密結社――男の子であれば胸がときめかないはずがない。

「つてことはあれか？ イ○デイ・ジョー○ズみたいな冒険とか、現代に遺つてるオーパーツの謎を暴いたりとか、トロイア戦争で大立ち回りしたりとか……！」

「アメリカ大陸を徒歩で横断したり、存命のギルガメッシュ王と一緒に世界を救つたり——」

「羨ますぎかよ……ツツ!!」

『はいはい、男の子談義はまた後でね』

ダヴィンチが脱線した話を無理矢理に軌道修正する。未だ焰の瞳には興味と追究心が見え隠れはするものの、彼女の言い分には一先ず納得したらしい。こほん、と咳ばらいをして身近なパイプ椅子に腰かける。

「霊子演算装置トリスメギストスⅡ……だっけ。その演算装置が言うには、立香の身体を介した術式であればこっちの世界に英霊を召喚することができる」と

『かなり難度が高いけど、私は万能の天才だからね。このくらい造作もないさ！』

「俺は未だにアンタがレオナルド・ダヴィンチだつて信じてないけどな。それとは別に天才であることは認めてるが」

『むむつ、君も中々頭が固いなあ。固定観念にとらわれているようじゃ、まだまだ研究者としては半人前止まりだぜ？』

「どこの世界に中身オッサン外見幼女の正体がダヴィンチだつて信じるやつがいるんだよ……！」

『それを言われると耳が痛い』

焰のような一般人の反応が新鮮で嬉しいのだろうか。いつもよりも数段テンションが高いダヴィンチはからからと笑いながら焰を揶揄う。

ひとしきり笑つて満足したのだろう。ダヴィンチは——未だ声が少し上ずっているが——再びはなしはじめた。

『話を戻そう。トリスメギストスⅡによればそちらの世界の脅威に対応できるサーヴァントは三基。ギリシャの大英雄ヘラクレス。世界的な弓の名手アーラシユ。そして迷宮ラビリンスの怪牛アステリオス。……さ

て、現時点で質問はあるかい？」

「じゃあ、俺から一つ。——なんでこの人選なんだ？俺が知ってるのは今朝教えてもらった英霊に関するあれこれだけだが、その程度の浅知恵でも人選がおかしいことはわかる」

西郷焔が知っているのは、英霊は知名度や地域によつて能力が制限されることもあれば強化されることもある——所謂「知名度補正」に関するものと、「神話や伝承からなる弱点がそのまま英霊の弱点となる」というものだ。知名度が全く無くとも、少なくとも一般人とは天と地ほど能力に差があるのは確かである。故に今回抜擢されたサーヴァントが日本由来である必要はどこにもない。だが——

「今俺たちがいる世界は星辰粒子体が原因で滅びかけてる。巨大樹も、怪物共も結局はその副産物に過ぎない。百歩譲つてその怪物どもに対するカウンターとして彼の^かギリシャの大英雄が抜擢されるのは理解できるが、選ばれた三人の英雄のおおまかな話を聞いた限りだと研究者としての側面は持ち合わせてないように感じたんだが……。もつと言うと、日本なんだから日本の英雄の方が勝手がいいんじゃないのか？」

彼の疑問点はそこにあった。トリスメギストスⅡが「最適である」と太鼓判を押したその意図が不明瞭なのだ。

もしも粒子体研究に邪魔なものが怪物であるならば、その怪物を完封できる英雄が選ばれるはずである。大百足であれば依藤太、竜退治であればジークフリートなどが良い例だろう。そういう観点からみると、アーラシユとヘラクレスの選ばれた理由は半ば強引ではあるが納得はいく。……しかしこの場合、アステリオスが選ばれた理由がわからない。

『いい着眼点だ、ミスター西郷。確かに召喚されるサーヴァントの目的が怪物退治であるなら、日本由来の英雄のほうが都合がいいだろうね。そうでなくても、ほかにもつと怪物退治のスペシャリストならいくらでもいる。つまり——』

「——粒子体の影響を受けた怪物以外の、なんらかの脅威が存在する。そしてその脅威に対応できるのが、この人選……ってことか」

『その推理でまず間違いないだろうね。事実、そちらの世界の異変の根幹は紀元前2000年のクレタ島であるとトリスメギストスⅡの演算結果は示している』

「えーと……クレタ島？」

『クレタ島は現ギリシャ共和国の南方に位置する、地中海最大の島国です。紀元前2000年といえば、ミノア文明が成立した直後くらいでしょうか』

紀元前2000年に成立したミノア文明は、当時ゼウスとエウロペの子“ミノス王”が統治していたクレタ島で栄えたものだ。前宮殿時代も含めると紀元前3700年頃から存在はしていたが、クノッソスの迷宮を代表とする宮殿の遺跡は主に紀元前2000年に造られたとされている。そしてクノッソスの迷宮といえば、

「——アステリオス」

『正解だ、ミスター藤丸』

クレタの牡牛とミノス王の妻パーシパエとの間に生まれた妾の子……それがアステリオスⅡミノタウロスだ。

『クレタの牡牛といえばヘラクレスの七番目の試練にも登場するので、因果関係的にはヘラクレスさんが抜擢される可能性は十分にありえますね』

マシユの解説に、焰は純粋な関心を覚えた。自分とそう変わらない見た目の少女が、教科書にも載っていないようなことをカンニングなしにすらすらと説明してのけた。こういうった知識彩に強里い者鈴が身近にいるだけに、普段の勉強がどれほど大変なのかも焰は知っている。

鈴華と話が合いそうだ——などと考えているうちに、話は進んでいく。

『ただ問題はアーラシユの存在だ。彼だけが日本とギリシヤのどちらにも関連性がないし、そもそも日本での彼の知名度はお世辞にも高いとは言えない。彼が大英雄であることは間違いないにしても、日本異聞帯の問題解決に最適だという理由がわからない』

「そうなのか？」

『はい。アーラシユさんはイラン神話最大の英雄として名高く、アー

ラシユ・カマンガー——アーラシユ・ザ・アーチャーという異名がある程に有名な弓の名手です。伝承に曰く、夜明けとともに放った一射は2500キロメートルを飛び、その後には大地を砕いて国境をつくりました。結果として彼は60年も続いた戦争を無血で終わらせたのです』

「に、2500キロ!？」

2500キロ。それは現代の弾道ミサイルの射程距離とおおよそ同じくらいの飛距離だ。大地を砕いて国境をつくったというのも十分に驚くべき要因であるが、それ以上にありえない伝承に焰は言葉を失うことしかできなかつた。

『今は兎に角、ミスター藤丸にサーヴァントを召喚してもらうことを優先すべきだと私は進言するよ。ギリシヤサイド——はバーサーカーだから仕方がないとして、今一番の頭痛の種であるミスターアラシユが混ざるだけで見えてくることもあるだろう』

「それもそうだね」

『本来であれば英霊を召喚するにあたって必要な触媒や魔力だけど、今回は特殊なケースだからね。理論上は此方で全て賄えるはずだよ。多少魔力は減るかもしれないけど、平時の十数分の一程度さ』

今回の英霊召喚に必要なものは立香の身一つだけだ。霊脈を探す必要もない為、今すぐにでも召喚自体は行える。が、そこに待ったをかける人物がいた。

「待ってくれ。俺には情報の真偽なんかわからないし、英霊召喚のイロハもてんで無知だ。だからせめて何か起きても問題ない場所で召喚をしてほしい」

焰の意見は尤もなものである。もしも英霊が暴れば自分たちの生活区域である教室——下手をすればこの辺り一帯が吹き飛びかねないのだ。英霊召喚を何度も行っている立香と違い、焰からすれば鬼が出るか蛇が出るかわからない。故にこの配慮も当然と言えば当然である。彼がカルデアの言葉を信じていないわけではないが、それとこれとは別の話だ。

「地下に割と広めの核シェルターがある。そこなら何もなし、万が

「暴れられても問題ない」

『……驚きました。話を聞いている限り色々な設備が揃っているなど——いえ、揃いすぎているなどは思っていましたけど……まさか格納庫まであるとは。もしかして日本の大学ってどこもこんな感じなんですか?』

「それこそまさかだ。ぶつちやけ俺も知ったときは度肝を抜かれたよ。他にも大規模な火力発電所とか、厚さ300ミリの外部装甲とか、消防車並みの消火機構とか。……マジで何に使うんだ?」

「なんかバイオ○ザードに出てきそうだね、こんな感じの建物」
そして現在に至る。

*

『ではでは! これより私たち、延いては立香さんたちの今後の方針についてのミーティングを開始します。ですがその前に、非常に今更感があります。がやらねばならないことが残っています』

フツフツフ、と大胆不敵な笑みを零し、シオンは人差し指を伸ばす。本人の知性や普段の挙動も相まって、そのポーズは非常に様になっていた。自らの父を「演劇狂い」と揶揄する彼女ではあるが、この親にしてこの子ありとでも言うべきか。本人に自覚があるかどうかはともかく、しっかりと遺伝子は仕事をしているように思える。

「やらなきゃいけないこと……改めて現状の整理とか?」

『そんな小難しいことではありませんとも。もっと初歩的かつコミュニケーションの上で必要不可欠なアレ——自己紹介!』

「……………ああ、確かに。そのふくよかなオッサンの名前も知らないし、改めて考えると俺はアンタら全員のフルネームを知らないし、逆に俺を知らないヤツもいる。そんな状態で適切な連携なんてとれるわけもないか」

『私はまだ29だ! オッサンと呼ばれる歳ではないッ!』

なんて小生意気な小僧なんだ、とゴルドルフ・ムジークは憤慨した。ふくよかと言われたのはともかく、オッサン呼ばわりは納得がいかな

いらしい。

「悪かったよオッサン。改めて、オレは西郷焰。一応第三種星辰粒子
体研究の第一人者だ」

「よろしく。焰」

『だからオッサンではない！ 私はノウム・カルデア現所長のゴル――』

この後滅茶苦茶自己紹介した。